

2. 家業を継ぐため今治へ帰郷

（株）ヤスハラは広島県福山市が原点

（株）ヤスハラの原点は、広島県福山市にある。安原史紀氏の祖父にあたる初代の安原新一氏は、広島県芦品郡芦田町（現在は福山市）で生まれ育った。女5人、男1人で新一氏も安原家の跡取りとして期待されていたが、瀬戸内海の向こう岸にある今治市が第二の故郷となり終の住処^{すまみか}となった。

新一氏は、染色関係の仕事に就くまで農業に従事し、また畳表^{たたみおもて}の職人見習いとしても働いた。芦田町は、「備後表^{びんごおもて}」の名称で知られる畳表の産地であり、その歴史は南北朝時代（1336年～1392年）に遡る。そうした背景から、新一氏は、畳表の職人を目指した時期もあった。しかし、話し上手で営業の才覚があったため、実姉を頼って福山市の染料卸業の岩瀬染料店（現在は岩瀬商店株式会社）に出入りするようになった。ある日、出先で立ち寄った尾道の船乗り場で、当時綿織物業が盛んだった今治の話を目にした。新一氏は「これだ」とひらめいた。「綿織物業には染料が欠かせない。つまり、染料は今治で売れる」と考えたのである。商売人の勘である。

さっそく店主に今治での取引着手について相談したが、店主から「信用のない新しい土地では商売はしない」と一蹴された。そこで引き下がる新一氏ではなかった。「それならば」と自ら奮起して単独で今治に渡り、岩瀬染料店に暖簾分けをしてもらう形で今治の地で商売を始めた。

今治と尾道は瀬戸内海を挟んで、それぞれ違う県に属している。しかし、海の交通の発達によって身近な存在であった。1897年に今治と尾道を結ぶ鉄道連絡船（瀬戸内商船の「東予丸」）が開設され、年々利用者が増えるなかで定期船航路も増加した。そして、高度成長期の1964年には水中翼船が就航した（尾道市「尾道商業会議所


記念館 第30回企画展示解説」2016年）。

こうした海の交通が戦前から発達を遂げ、瀬戸内海を介した「しまなみ地域」の人々の往来は活発化した。鉄道連絡船は、「瀬戸内しまなみ海道（西瀬戸自動車道）」が開通する1999年まで、人々の重要な足だったのである。




新一氏が暖簾分けしてもらった際に今治に持参した屋号入りそろばん。表はそろばん（下）、裏は「岩瀬染料店」の屋号が彫ってある。



表1は、ヤスハラノ略年譜である。1922年に新一氏の個人事業として今治で繊維染色向け染料および工業薬品の販売をおこなう安原商店が創業された。見知らぬ土地での商売は苦労もあったが、「染料は売れる」と睨んだ新一氏の勘は当たった。今治市とその周辺地域は、小幅綿織物、広幅綿織物、綿ネル、タオルという具合に時代のニーズに合わせて製品を変えながら、綿織物産地として発展していた。その結果、染料の需要も増加した。加えて、「**範囲の経済**」を活用して、製紙向けの染料および工業薬品の販売も手がけた。

新一氏が染料卸業を今治で開業した頃は、すでに化学染料が主流になっており、ドイツからの輸入品で占められた。化学染料は、

1854年にイギリス人のパーキンによって人工染料がつけられたのが最初と言われているが、本格的な研究開発はドイツでおこなわれた（米川伸一「ドイツ染料工業と『イー・ゲー染料株式会社』の成立過程」『一橋論叢』第64巻第5号、一橋大学、1970年11月、575-611頁）。第一次世界大戦まで世界の化学染料の8割から9割はドイツ製であり、日本に輸入された化学染料はおもに3大化学メーカーと呼ばれた、バسف（BASF）、バイエル、ヘキスト  の製品であった。第一次世界大戦によってドイツ製染料の輸入は一時途絶えるが、その後も技術的優位を背景に日本における市場開拓に力を入れ、また日本でも工場を設置して製造をおこなうようになった。

年月	内容
1922年11月	安原新一が今治で繊維染色向け染料・工業薬品の販売を開始。それに伴い、東予地区一円の製紙向け染料・工業薬品販売も開始。
1952年6月	（株）安原商店として法人化、同時に2代目の義男が新一と並んで代表取締役に就任（二人代表制）。 三島地区製紙業を対象とする販売を拡充するため出張所を川之江に設置。
1982年10月	川之江営業所に改称。
1983年	タオルプリント用エマルジョンおよびバインダー製造を開始し、染色全般への拡充を図る。 紙関連分野の開拓を開始。
1987年	四国地区以外の営業をフォローする関連会社としてシキ産業（株）を設立し、大阪に事務所を置いて西日本地区の営業を開始。
1988年5月	本社の新社屋完成。
1993年7月	大阪営業所を開設し、繊維染色・繊維関連商品、製紙・紙関連商品、不織布関連商品の販売拡充を図る。
1994年4月	（株）安原商店から（株）ヤスハラに名称変更。
2004年	窓用多目的フィルムの販売・施工を開始。
2005年	各種薬剤のミキシングサービスを開始。
2006年	環境事業へ進出。 川之江営業所に臨海倉庫を新築。

出典：（株）ヤスハラHPより引用。

安原商店では、ドイツ製染料の卸業を中心に今治地域で事業基盤を形成していったが、日本が1937年の日中戦争を皮切りに大規模

な戦争に突入すると、国の命令により松油を製造するようになった。松の木から抽出した油は、潤滑油として戦闘機などの軍用機に使用された。松油製造は1950年頃までつづき、その後染料卸業を復活させたが、松油製造事業は安原商店からスピアウトしたヤスハラケミカル（株）に委譲された。

戦争が終結して平和な時代が訪れると、安原商店は戦前の商売に復帰した。そして1952年、安原商店は株式会社に法人化され、同時に安原氏の父親である義男氏が2代目を継承した。ただし、新一氏と連名の代表取締役就任であり、厳密には、初代と2代目の二人が代表取締役に就く、「二人代表制」となった。

義男氏は、初代の新一氏に男の子がいなかったため、長女のマサエ氏の婿として安原家に迎え入れられた。「安原家は女系家族だからな」と安原氏が言うように、子沢山でも男の子が一人もいないか、あるいは長男一人かのどちらかであった。安原氏本人も上と下が女の子で安原家では唯一の男の子だったため、長男ゆえ跡取りとしての重圧感は幼少の頃よりあった。

またこの年に、愛媛県東予地区、つまり現在の四国中央市周辺の三島地区の製紙事業を対象とする商品の販売拡充を目的に、今治から自動車で1時間20分ほどの距離にある川之江市（現在は四国中央市）に川之江出張所（1982年に川之江営業所に改称）が開設された。

戦後は再びドイツから染料が輸入されたが、価格は高かった。しかし、輸入染料の価格は次第に落ち着き、タオル工業の発展で染料の需要が伸びていくにつれて大量に消費されるようになった。過剰生産や人手不足、人件費の上昇などの問題に直面しながらも高度成長期、安定成長期、1980年代のバブル経済におけるタオル工業の発展を受けて、ヤスハラは事業を拡充させていった。1983年にタオルプリント用エマルジョン（油性インクと水性ゲルインクを特殊な方法で混合させた染料）やバインダー（顔料を繊維に固着させる

ための接着剤）の製造を開始した。製造面のみならず販売面においても従来以上に力を入れ、1993年に大阪営業所を開設した。





（株）ヤスハラ本社

もがいた末、腹をくぐる

さて、話を安原氏自身に戻すと、ヨーロッパ行きの誘惑に駆られて帰郷したものの、その夢はあっけなく幻に消えて安原商店に入社した安原氏は、最初、川之江出張所の営業見習いとして配属された。商品を配送したり、顧客の名前と顔を覚えたり、現場を見回ったり、新入社員のやるべきことを一通りやった。いまでは笑い話だが、入社当初は毎日スーツケースに洗濯物をはじめ必要な荷物を放り込んで、いつでも「逃げられる」ような生活をしてきた。しかし、「いい加減なことをやっていたら、やっぱりツケは回ってきますね」と安原氏が懐古しながら言うように、周りが心配していろいろと安原氏に物申すようになり、少しずつ自分のなかでも変化が訪れた。30歳くらいまで自分のなかで常時葛藤があり、もがいた時期は長かったが、「覚悟」を決めてからは仕事に精進した。

川之江出張所では、タオル用染料ではなく製紙用染料をおもに扱っていたため、製紙用染料および工業薬品に関する知識の習得に一

意専心した。ついで繊維用染料についても勉強した。しかし、新規の顧客を獲得したり、商品の配達の際に既存の顧客に新しい商品の提案をしたりするには机上の知識だけでは不十分だったため、20代は製造現場にも積極的に赴いた。たとえば、取引先の染料メーカーで大阪にある三井東圧化学（株）（現在は三井化学株式会社）や東京にある保土谷化学工業（株）などで短期間の研修を何度も重ねた。

大阪での研修中、日本万国博覧会（大阪万博）を絶好のタイミングでリアルに感じられたのは幸運だった。東京オリンピックのときもそうであったが、変わりゆく大阪と躍動する日本の元気な姿は、安原氏にとっても刺激的な体験となった。

30歳を過ぎた頃、安原氏は、学生時代から長くもがいた末に自分の運命を受け入れ、将来経営者となる決意を固めた。そして、35歳のときには会社の舵取りを任されるようになり、登記簿上でも父親の義男氏との連名で代表取締役就任した。（次号につづく）

